

随 想

晴耕雨読

高田 健三

大正 14 年生まれである私は、昭和の年代と同じく年齢を重ねて来たせい、昨年元号が平成に変わった時、私の身分保障が急になくなった感じがした。先日、目に入った何かの申込書の生年月日欄に、昭和の年号しか印刷してなかったのを見て愕然とした。正に大正は遠くなりにはけりである。それにしても明治生まれの 90 才を越えた母や 80 才に届く家内の母が共に元気で居るのを見るにつけ、生命科学の今日の進歩には驚異を感じずには居られない。昔は喜寿や米寿を迎えたお年寄りをみると、その人達の不断の精進などが想像されてある種の畏敬の念を覚えたりしたものである。しかし高齢化が進んだ現代社会では、昔に比べるとお年寄りの分が悪くなったような感じがする。地下鉄のシルバーシートにもそう簡単には座らせてはくれないし、街には若者向けの商品ばかりが目につく。当然ストレスも溜りもしよう。まだ矍鑠たる我が母達が時には私を子供扱いするのは、自分達の存在を誇示したいためであろうか。子たらんとするもなかなか大変である。

その子供も昨年 4 月、学生時代も含めると 40 数年お世話になった名古屋大学を無事定年退官した。いよいよ私も「余生」の第一歩を踏み出すこととなった。時あたかも平成元年、なんと験のよいことか。論文を書くときはためらいもなくキリスト歴を使うにも拘らず、我が人生の年譜には元号の方が実在感があつて私は好きなのである。よく晴耕雨読の余生なるものが、功成り名遂げた人の姿として語られるが、私はどちらも達成していないので全くそんな気にはならない。ましてやこの高齢化社会に、非生産的な人間が増えてよいものかと思う。我が家がホームドクターと呼んでいる長年かかりつけの医者にもかねがね、定年直ぐから仕事を止めると、直ぐにボケて直ぐに死ぬぞと、やたら直ぐという言葉で脅されもしていた。幸いに先輩のお招きで、同朋大学で教鞭をとることが決っていたので、昨年 4 月から新しい仕事が始まった。自然科学の講義を受け持つことになったが、文科系大学ということもあつて、内容もかなり工夫を凝らしたりもした。さて蓋をあけて見て驚いたのは、1 クラスが 150 人とか 200

人という大人数だったことである。大教室の後方の学生は顔も定かには見えな
いし、毎週が講演会をやっているような状態である。不断から大人数の学生を
相手にしておられる先生方からすれば実になさけないことながら、そのことは
研究室中心の小人数を相手にして来た私にとっては大きなインパクトであった
らしい。5月の中旬になって体の不調に気がついた。

私は頑健ではないが今まで大病の経験はないし、若い人に比べ病欠勤が少
ないことで威張ってもいた。それが軽い頭痛と体が浮いた感じが続いたので、
しぶしぶ例のホームドクターに診てもらったところ、血圧が異常に高いという。
これが高血圧の感じかなどと実感を味わったりしたが、「気の張るであろう国立
大の勤めから解放されたというのに、今になって血圧が上がるとはおかしな人
だ」と笑われもした。原因が何か判らないうちに正常に戻った。すると今度は
肩こりがして首が回らなくなった。そのうち治るだろうと思っていたが一向に
よくなる。これを聞いた友人がよく効く鍼灸院を紹介してくれた。元来私
はこの手のものは苦手であったが、周囲の者に押し出されるようにして出かけ
た。案の定、揉まれた上に鍼を体じゅうに打たれて恐怖の一時間であった。も
う二度と来ないぞと思って帰って来たが、翌朝目が覚めてみると体が軽いでは
ないか。数日後、内心では抵抗しながら鍼灸院の戸をたたいていた。驚いたこ
とに二度の治療で治ってしまった。東洋医術のファンが多いのもむべなるかな
である。

春の珍事も大したことはなく、夏以後は至極快調で、我が平成の人生も第 2
年目を迎えた。人材活用センター等の調べによると、再就職者は今やホワイト
カラーの大きなパワーになっているという。寿命が大幅に伸びている現在、当
然のことであろう。むしろ、戦争という経験を持つ我々の年代は世界的に社会
体制が激動状態にあるときこそ、果たすべき役割があるように思える。日本も
来週から衆議院総選挙に突入する。この拙文が印刷物になった頃、日本はどう
なっているであろうか。晴耕雨読どころではない。今の大学では講義や教授会、
その他の仕事をこなしても、文科系であるのでデスクワーク以外研究室に留ま
っていることもないので、ウィークデイにも出勤しない日がある。そんな時、
引き続き研究を推進してくれている名大の研究室から連絡があると、出掛けて
行ってあれこれデータの検討をしたり、名市大の共同研究者と実験のプランを
考えたりする。これは私にとって生命科学の現実に直接触れられる時間とあつ
て極めて貴重である。しかし次の世代の研究体制もほぼ完了した今、いつまで
もそういうことを続けてよいものではない。自分自身のものをつくるべくプラ

ンを練っている。

そんなある日、朝、目を覚ますと昨夜からの雪がうっすらと庭の木々にも積もっていて、墨絵の世界の配色になっていた。葉を落とした八事山特有の雑木さえも、妙に絵画的に見える。そんな中で椿の花と薔柑子の実の赤が色を添えていた。ふっと、芭蕉ならばどんな句をひねるだろうかと思った。近頃また読み始めた芭蕉や蕪村のせいであろう。見れば椿の花も雪を被っていた。何でもやって見ようの精神から駄句をひとつ。

雪ぼうし かぶりて紅し やぶ椿
淡雪に 紅にじませし 花つばき

庭に臘梅が一株あって、家内が丹精こめてはいるが、今年もまた花つきが悪い。それを思っか御近所の方が花のよくついた一枝を持って来て下さった。濃厚な沈丁花と異なって、その香りは清楚な美人を思わせる。

風揺らぎ 臘梅の香の 濃く淡く

頂いた一枝が軟らかい冬日の差し込む部屋の棚でひとり香りを放っている。

静けさに 臘梅の香の 佇みぬ

今回もまた極めて稚拙な域を脱し得ない。わずか17音の詩の中に、限りない空間と時間の世界を凝集し得る俳聖たちの感性は、一体どのようなものであろうか。如何に人工頭脳が発達しても、彼等の精神活動の領域には到達し得ないであろうなどと思っている中に、明日の講義の下調べが済んでいないことに気がついた。ダーウィンの「種の起源」についての調べもので夜遅くまでかかった。さて明日は、どこまで学生達を引きつけられるか、またファイトが湧いて来た。やはり晴耕雨読は私には程遠い世界の世界のようである。

(名古屋大学名誉教授)